

〈調査報告〉

中国における日本語教育

——西安培華大学の現状——

山 崎 淳 子

目 次

はじめに	4 カリキュラムと学生の進路
1 中国の大学事情	(1) 本科学生のカリキュラム
2 西安培華大学の歩みと現況 ——中国最初の私立大学	(2) 学生の学習状況
3 外国部学部日本語学科	(3) 日本語能力試験一級合格者について
(1) あらかじめ準備ができない大学	(4) 一級合格者13名の卒業論文と進路
(2) 授業開始当日	5 台湾学会参加と契約更新
(3) 古すぎる新聞教材と扱った内容	(1) 台湾学会参加問題
(4) DVD による授業	(2) 「東アジア共同体」を読む
(5) 「西安日本語教師の会」への参加	(3) 日本の大学院進学を目指す学生たち
	ま と め

は じ め に

2003年から2008年まで、シニアボランティア（JICA の外郭団体 NPO）から中国へ日本語教師として派遣され、常州旅遊学校（江蘇省）と西安培華大学（陝西省）で、日本語教育に携わる機会を得た。

中国の高等教育は経済成長とともに大幅に学生数が増えているが、それに見合うだけの教育内容・条件は不十分で、指導上大きな困難を抱えている。悪条件の中で、学生は日夜学習への努力を惜しまず生活している。この姿は私の授業作りを励ますものであった。

定年退職後、中国で教鞭をとることは世界史教師であった私にとって、未知の教育活動であり、不安であったが、自分の目線で中国の人を知るいい機会だと考えた。二年間の常州旅遊学校での教師生活を最後にしようと考えていたが、一年後、続いて西安培華大学で、日本語教師派遣の話があると、もう一度中国へ行こうという気持ちになった。古都西安である事と、常州同様に学ぶ学生に出会えるだろうという期待があった。

これら二回の日本語教師としての経験を通して、私がいまも心動かされたのは中国人学生の学習意欲であり、その日本語学習の努力がどのようになされ、それを通してどのような進路を学生たちが切り開き、選ぼうとしているのかを以下で報告する。

1 中国の大学事情

中国では文化大革命中の教育の空白を埋めるために80・90年代に教育制度が整備されていった。経済成長も目覚しく、86年には義務教育制度の基盤整備、93年には「中国教育改革と発展要綱」が公布され、教育の基盤が確立した。高等教育は98年度から朱鎔基首相のかかげた「科教興国」に基づいて、99年から大学定員数を大幅に増やしている。大学生数は95年に約291万人であったが、02年931万人と約3倍に増加している。その後、経済成長に伴い進学率は上がり続け、大学の受験競争は激化している（高井潔司・遊川和朗「現在中国を知るための60章」明石書店04年発行 第二版 p. 122～124）

中国の殆どの大学は4年制の本科と3年制の専科を備えている。前者は大学卒の資格と学士資格、後者は学士資格は与えられず、大学卒の資格のみが授与される。専科の学費は本科の6割くらいである。日本の大学に一期校・二期校があったように、中国も一本（国立の難関受験校）・二本（省立などの公立と国立）・三本（私立大学）に分けられる。三本と言うのは私立大学で、西安培華大学はこれに属している。大学の受験の難易度は一本・二本・三本の順である。

2 西安培華大学の歩みと現況——中国最初の私立大学

大学の創立は1928年にさかのぼり、08年には80周年の記念式典を盛大に行っている。この大学の創立者は張学良、楊虎城であり、西安培華大学は邵力子夫妻と楊虎城夫人の謝葆真の出資で設立された。その後、36年には男子の入学も認められ、西安培華財經職業学校となった。84年には人民政府の批准により職業学校を基にして西安培華大学として認められ、本科大学に昇格した。現在は全国から学生を募集し32000人の学生が在籍する大規模校である。

男女共学で、臨床医学部・看護学部・法学部・新聞学部・経済学部・電子商学部・国際ビジネス学部・芸術設計学部・外国語学部などの多くの学部からなる。そして、スポーツクラブや日本語クラブなどもあり、活動は多様に広がっている。大学は中国で私立大学の第1号で、私学の多い西安ではその老舗だと言われる。この大学からは西北大学や西安交通大学の大学院への進学者が多く、大学院を目指す学生がこの大学へ集まるとも言われる。

大学の日本語科は各学年本科が2クラスずつあるが、専科は学年毎にクラス数は異なる。学生は台湾・チベット以外の中国全土から入学している。外国語学部は英語科・日本語科が置かれているが、両者ともネイティブの専任教授はいない。学生たちが強く受け入れを希望する留学生もいない。図書館もあまり専門書が揃っていないことが、学生たちには大変な不満である。

国の教育制度整備で急激に大学生が増加したので教育条件・研究条件が不備なのであろう。常州でも培華でも教師の授業準備の条件などを配慮してくれる学校ではなかった。日本人の日本語教師が確保できるかどうかという点に重点をおいているようであり、それだけ教師不足が深刻な

のであろう。しかし、教師たちの殆どが始業ベルの前に教室に入り、授業を進めようと学生の入室を待っている。これは中国の伝統なのかもしれない。

3 外国部学部日本語科

(1) あらかじめ準備が出来ない大学

06年10月22日の夜に西安に到着。西安は冷え込み、寒い所だというのが第一印象だ。

西安到着が大幅に遅れたので、早く授業をしたいと考えて月曜日に着いたが、次週から授業開始で、担当クラス名は到着の3日後に、知らされた。しかし、担当科目や教科書は分からない。日本からもそれらを早く知りたいと訊ねていたが、駄目であった。今回は大学で、しかも学期が始まって2カ月近く経ているから、私の質問は簡単に答えられると考えていたが無理であった。授業開始の2日前に視聴説（DVDの映像を学生に見せて、授業をする）の授業と日本語会話を担当することが伝えられた。DVDの内容を訊ねたが、「それは大学に準備されています」と言うだけで、内容は全くわからなかった。

(2) 授業開始当日

10月30日、スクールバスで大学へ到着（宿舎から大学まで40km位）。授業開始の15分前に視聴覚室で沢山のDVD収納の引き出しを見せられ、「これを使って授業してください」と示された。でも、その内容はわからず、リストもない状況である。教室でDVDを学生に見せることができることしか分からなかった。

中国人の教師はこんな状況でいきなり授業するのだろうか？ 常州では会話だけだったのでこうした経験はなかった。持ち時間は日本語科の8クラスで、2・3年生の本科5クラスと専科3クラスの計16時間である。1年生以外は何とか日本語は通じる。週4日出勤し、一日4時間ずつ教え、水曜日は授業がない。ゆっくりとした時間割編成であることと、日本のように雑務がないことは授業作りに好条件である。

最初の授業は2年生本科で、少し日本語のわかる学生たちであった。担当者が内容を知らないDVDは見せられないので、学生の自己紹介を日本語でさせた。氏名・出身地・日本語科を選んだ理由・趣味・将来の進路希望などである。そして話したいことを日本語で書いて提出させた。私も西安に来た理由を「学生が真面目に学ぶ姿が好きなことと、古都西安の遺跡を実際に見て知りたいこと、京都と西安は姉妹都市であること」などを黒板に書いて日本語で説明をした。ゆっくりとボディ・ランゲジや絵を板書しながらの授業である。

学生の自己紹介文には「待ちに待った日本語外教（外国人教師）がやってきた」と歓迎の言葉を述べ、「親が自分を大学に進学させてくれたのだから勉強することは当然であるが、まだまだ力が足りないから先生のご指導は重要」などその内容は、私を励ますものであった。「学生からはそんなに年をとってから、どうしてこんな遠い所へきたのか」「娘や息子がいないのか」など

率直な質問が沢山出された。中国人学生の感覚では身寄りがいいから、こんな遠くへ仕事に来なければならぬのだろう、と考えているように見えた。後で、ある学生が「中国の老人と先生は違う。中国の老人は孫の世話をするのが普通だから」と話してくれた。今、日本で主張され始めた「高齢者現役力」という考え方は、まだまだこの国にはないのだろう。

学校の DVD は日本語のドラマで字幕が中国語で入っている。内容が殺人・詐欺・三角関係などショッキングで分かりやすいものである。しかし、娯楽的なもので、大学生には是非見せたい内容のものではなかった。内容の少しでも良いものを選び授業で使った。DVD 鑑賞後の授業展開は、内容の概要を話させたり、分からなかった点を質問させること。私も質問などを準備し、発表をさせたりした。最後に、日本語であらすじを書かせ、本人の感想・意見を述べた日本文を書いて提出させる方法をとった。学生の提出した日本語を読むのは大変で、それらの添削に追われる毎日となった。

日本語主任の韓小燕氏に教材内容が不満で、誰が DVD 教材を確定するのか訊ねたが、彼女も知らなかった。彼女は教材は担当者が自由に決めることが出来ると言う。しかし、担当者が必要な教材を申し出て、学校に準備依頼はできない。教材選択が自由でも、私には慣れない西安では出来なかった。仕方なく、学校の準備したもので、その学期の授業は行った。会話授業は、誤記の多い教科書ではあるが、困らずに進めることが出来た。そのうち、学生から「日本のよいドラマを見たい」とか、「映画『伊豆の踊り子』『雪国』などがやれないのですか」などの要望も聞けるようになったが、実施することはできなかった。

授業で必要なプリントも大学に頼めないが、準備した原稿教材を学生のクラス班長に渡して置くと、クラス全員分をコピーし、授業前に配布しておいてくれる。ここでは常州よりやりやすく安心して、いろいろな印刷物を授業で使うことができた。

(3) 古すぎる新聞教材と扱った内容

二年目の9月は、授業を始める2日前に、担当授業の時間表と、教科書を受け取った。科目は日本報刊選読（新聞）である。これも夏休みの帰省前に知っていれば、時事問題などいろいろ準備が出来たのにと、何も知らせてくれなかったことに不満であった。支給された教科書を見ると日本の毎日新聞の1991年の記事である。教える時点は2007年9月である。どうして15年以上も前の新聞なのだろうと考えざるを得なかった。その教科書の中に日本の政治の仕組みの三権分立など、基本的なことも入っていた。それは教材として使えるので、中国の政治の仕組みと根本的に異なる点を強調して2週間はそれで授業を進めた。その間に日本から、雑誌 Foresight（月刊誌：新潮社発行 世界の政治と経済のことが中心の著名入り記事）を最近もの2年分ほどを送ってもらい、それを教材にすすめることにした。

教材として取り上げた記事2・3を挙げる。a「女性のための大学をアジアの途上国に作りたい」（キャッシー松井 同誌07年8月号 p. 55）、b「国連公用語とはなにか」（町田健 同誌07年8・9月号 p. 59）、c「規則性の高い日本語の覚えやすさ」（町田健 同誌07年10月号 p. 59）、d

「英語のパブリック性」(梅田望夫 同誌07年7月号 p. 50) などである。a は、ハーバード大学の卒業生の日系アメリカ人女性キャシー松井がアジアの貧困を緩和するためには女性の大学教育が必要だと考えた。そこでバングラディッシュに一流の女子大を09年に作るため、卒業生にその設立基金を呼びかけた。学費有料者と無料者を一緒に教育する大学建設の計画の記事であり、培華の日本語科は女子学生が7割くらいのものであるから、反応は大きかった。b は、国連公用語が6つになった理由を扱ったものである。創立と関わった戦勝国 英・仏・中・露の言葉に、話者の多いアラビア語・スペイン語が採用されている話である。スペイン語が国内話者3000万人、海外話者が3億人以上になっている問題(中南米の話者はスペイン語)に関心を示した。理由は中国語のように世界一の話者数を持つ国で、その殆どが中国内にいるのとは大きく異なるからである。c は、日本は8世紀にまだ文字が出来ておらず、漢字を借りた万葉仮名で万葉集が書かれていることを通して、中国から日本への漢字の伝来を扱ったもので、学生は興味を示した。d は、ハーバード大学での講義がいつでも・どこでも・誰でも、インターネットでダウンロードして無料で聴くことが出来るという記事である。「人類の公共財産たる知を広く誰にでも利用を可能にする事は善なのだ」という英語圏のパブリックな意識に学生達は感心し、アジアの言葉に公共意識が必要だと思い、今後、英語とのかかわりを強めたいと考えたようだ。

これらについて、授業終了後、学生の評価は二つに分かれた。多くの者は、中国以外の国のことと言葉の持つ公共性の意味が分かり、これからの中国人が知らなければならないことを習ったと評価するものであった。しかし、どのクラスも、日本語の授業だから日本の現在の流行や若者の読む本の傾向、ファッション、音楽、アニメなどが知りたかったという意見もあり、担当者としては日本語の教師であるから、もっと日本文化に引きつけた授業展開をするべきだったのではないかと考えさせられた。

(4) DVD による授業

私は、春節明けの07年度の後期からは何を教えるのかを帰国前に主任に打診をした。韓小燕主任は「多分、後期はDVDの授業でしょう。でも、そうならないかもしれませんよ」とも言った。後期はDVDの授業担当者にならなくてもいいから帰国中に学生たちに見せたいDVD教材を考えておくことにした。DVDを使う場合、言葉の問題で字幕スーパー(中国語)のあるものが必要(二年生の場合)であるが、日本では販売していない。中国ではそうしたものの海賊版が安く手に入る(どれも10元くらい)ので、それを探すことにした。幸い私の選んだ宮崎駿監督の作品と「1リットルの涙」を持っている学生が授業のために提供してくれた。

07年度の後期の授業はそれなりに準備が出来たので、「魔女の宅急便」「千と千尋の神隠し」「耳を澄ませば」などのアニメと日本のドラマ「1リットルの涙」などを見せた。これらの作品から、環境問題・自立の問題・愛の問題・日本の社会制度の問題・人の生きぬくことの重要性などを学生に討論させ、共に考えることが出来た。私の使用する視聴覚室も固定し、落ち着いて学生達に理解して欲しい事を十分に伝えられたのではないかと考える。

(5) 「西安日本語教師の会」への参加

西安は北京・上海について大学が多い都市である。「西安日本語教師の会」が日本人・中国人により組織されていた。初年度は全く知らなかったが2年目に京都の高校の元校長の藤田氏が陝西師範大学で日本語教師をしていたので、彼から「西安日本語教師の会」を紹介され、数回参加した。多い時は50人以上、少ない時でも20人位の参加者であり、盛況であった。

会長は宮本晶子という日本人の西安交通大学の先生で、龍大卒業の30代の美しい女性であった。「日本語教師の会」と関わることで、「日本語能力試験」などの改定のことを北京にある日本の国際交流基金から説明に来ると呼びかけられ、参加した。そのために学生に2009年に大幅に変更される日本語能力試験の情報（年一回が二回になるなど）を伝えることが出来た。何度も中国人同僚の日本語教師に「日本語教師の会」への参加を呼びかけたが誰も「忙しい」と言って参加しなかった。学生は新しい情報を切望しているのだから、専任教師がこれに参加し、学生に伝えなければならないのではないかと。どうして参加しなのだろう。

4 カリキュラムと学生の進路

最初に大学本科学士のカリキュラムの概要を示し、06年の三年生（07年度卒業生）が日本語能力試験一級合格をめざしどのような学習をしたのかを聞き取り、その内容と一年後、彼らがどのような進路を歩んでいるのか（08年10月時点）について述べる。

(1) 本科学士のカリキュラム

① カリキュラム

表1 本科カリキュラム表

(数字は週当たりの授業時間数 一校時 50分)

	日 本 語 関 係 科 目				小計	日本語関係以外の科目		小計	合計
1 年生	日本語精読16	日語会話 6			30	法律 4	毛沢東概論 2	10	40
	聴解 4	視聴説 4				体育 4			
2 年生	聴解 6	基礎日語16	日語会話 4		34	体育 4	マルクス主義哲学 2	8	42
	日語泛読 4	日本概況 2	視聴説 2				マルクス経済学原理 2		
3 年生	高級日語12	翻訳 4	商業貿易 4	聴解 4	34	英語 8		8	42
	写作 4	日語語法 2	視聴説 4						
4 年生	日語精読 4	通訳 2	翻訳 2	新聞 2	16	英語 4		4	20
	視聴説 2	商務礼儀 2	卒業論文 2						
合計					114			30	144

- ・各クラスサイズは30数名から多いところは39名
- ・授業は週5日制 月曜日から金曜日まで
- ・午前8:10～12:00 各50分 4校時 3回の休憩時間（一年中同じ）
午後14:10～18:00 各50分 4校時 3回の休憩時間（5月の労働節から10月の国慶節までは午後だけ30分遅くなる）
- ・前期 9月1日～春節の1週間から10日くらい前に前期終了。期末考査は前期が終わる直前に実施
- ・後期 春節の2週間後くらいに授業開始、6月半ばまで、その後期末考査
- ・前・後期の授業時数の差 春節が旧暦であるため、1ヶ月くらいの差がある

表1で明らかなように、日本語の専門科目が占める比率は各学年とも大変大きい。学年が上がると毎に日本語関係の科目数は3年生まで増える。日本語関係科目の比率は1年生で75%、2年生・3年生で共に81%、4年生80%である。全カリキュラムの総単位数は144単位で、その中の日本語関係科目は114単位であり、79.2%と相当高い比率となっている。3年生前期に日本語能力試験を受験する（3年生前期終了）までに学ぶ日本語科の授業総単位数104単位で、そのうち日本語関係科目は82単位であるから全体の78.8%である。

② 行事

大学の行事には運動会・学園祭・スピーチコンテストなどがある。

軍事訓練：1年生入学後2・3週間すると軍事訓練が2週間学内で行われ、その間、授業は行われない。全員が迷彩色の服を着て、男女別に軍の指導者が来て行う。すでに彼らは中学・高校でも同じ訓練を受けている。徴兵制のない国であるが、全学生は訓練に参加しなければならない。運動場でこうした風景を眺めながら、この訓練と愛国心の関係はどうなのだろうか考えさせられた。日本では見られない風景であるだけに興味深い。写真も撮りたかったが外国人の私が中国の軍関係の写真を撮ることは躊躇された。

運動会：4月に全学園参加で実施。他大学も同じ時期に実施。クラブ活動は余り盛んでないが、運動場はいつも満員で学生たちが空き時間を利用していろんなスポーツを行っている。運動会の3日間は授業はない。運動会は振り替え授業があるが、軍事訓練の振り替え授業はない。

(2) 学生の学習状況

① 学生からの多数の質問

授業を始めたのが10月末で、3年生の本科2クラスは毎週DVDの授業であったが、これ以外に日本語の文法や漢字の読み方や言葉の使用法の質問をしてくる。12月に日本語能力試験があるので、それに向けての学生達の猛勉強の時期であった。

朝、スクールバスが到着。そこに質問する学生が待っている。多数なので、質問をメモで持ってきてさせ、授業の合間の休憩時間に説明をして解答を手渡すという方法を取った。

やまと言葉（＝和語）に属する副詞・形容詞などはとても中国人には難しいと受け止められ質問もよく出される。更に、学生達の一番苦手とする言葉は敬語と謙譲語である。質問に来る学生は「先生、敬語がうまく使えないかもしれませんが許してください」と断って質問する者もいる。また「お花」「ご指導」の「お」と「ご」との使い分けは難しく、E-mailを「おE-mailありがとうございます」と書いてくる学生もたくさんいる。そして、自動詞・他動詞の意味を理解して使うことは大変難しいと訴えている。

② 学生の努力する姿

朝、校門でバスを降りると運動場や校舎の周に学生達が一人ずつ、ばらばらに立って、手にはノートか教科書を持っている。また、授業の始まる前に教室へ行く時、校舎間を繋ぐ幅20m・長さ50m位もある渡り廊下の学生の様子も同じである。彼等は暗記をしている者、大声で本を

読んでいる者などである。大学の寮は校舎の北側に20棟位7階建が立ち並んでいる。殆どの学生がそこで生活している。

夕方、6時半頃に授業が終わる。学生達の夕食後は、自習の時間である。殆どの学生が寮生で、しかも同じ専門の者が同室である。授業後の教室が10時半まで自習室として開放されているから、そこで勉強する。大学の周囲は丘陵で、その向こうの小さな村にインターネットバー、卓球場、小物を売る店などがある。その商店街へ出かけるくらいで、あまり盛り場があって遊ぶ場所はない。だから、学生たちは遊びにせず、欠席者も少なく、教師の話に耳を傾け、授業も大変真面目に聞いている。

(3) 日本語能力試験一級合格者について

3年生の日本語能力試験は2006年の12月3日(日)西安外国語大学で実施。外大は西安培華大学からバスで30分くらいの場所。

① 3年生の日本語能力試験の受験状況

日本語能力試験一級合格者は全員女性。入学後、2年3ヶ月の時点での受験である。彼らは日本語能力試験を受験した経験がなく初めて一級を受験。二クラスの一級受験者は58名中、合格が13名で、22%位の合格率。二級受験者5名は全員不合格。一人は事情があり受験せず。

② 得点と分析

表2 日本語能力試験一級合格者一覧

学生	出身地	生年	文字語彙	聴解	文法読解	得点
A	湖北省仙桃市	87	89	58	169	316
B	湖北省咸寧市崇陽県	85	70	89	172	331
C	湖北省武漢市	85	89	77	177	343
D	福建省龍岩市永定県	84	82	73	152	307
E	黒龍江省牡丹江市	85	92	70	157	319
F	浙江省衢州市	85	80	55	159	294
G	河南省南陽市	85	84	53	153	290
H	広東省	85	84	70	158	312
I	湖北省	85	72	55	155	282
J	黒龍江省	84	82	53	166	301
K	山東省	85	88	47	163	298
L	江蘇省無錫	86	84	70	168	322
M	浙江省	86	93	63	153	309
	平均点		83.8	64.1	161.7	309.5

400点満点で280点以上が合格、総点の得点率は77.3%となる。表2から言えることは聴解の正答率がもっとも低くなっている。聞くことが一番難しいと学生達は言っているが得点も低い。文字・語彙は漢字圏の国であるから高得点で84%に近い。合格者以外の学生も同じ傾向である。

③ 合格者からの聞き取り

聞き取りの期間は2007年の9月・10月で聞き取り方法は2時間の昼休み時間を使い、食堂や学校の近くのレストランなどで行った。不十分なところは電話で確かめた。また、聞き取り後、

内容をプリントアウトして本人に確認をとった。

〈学生への質問項目と主な答え〉

i) 日本語学科を選んだ理由

- a 理系の科目が得意でない。 b 英語が上手でないこと。
- c 日本のアニメーション・ドラマなどを見て日本語を理解したいと考えた。
- d 英語は誰もが身に付けるので就職機会が少なくなると考え、進路との関係で選んだ。
- e 日本企業の中国への進出が目覚しいので、そこへの就職の機会が多いと考えた。
- f 日本留学がしたい。 g 女性に通訳・翻訳は向いている仕事だと考えた。

ii) 日本語の学習で大切だと考えたこと

- a 日本語に興味を持つこと、これは日本のアニメや映画を見て、それに親しむ。
- b 次に聞くこと、話すことが出来ると意見交換が可能になり、日本語学習に熱が入る。一番、中国人に難しいのは日本語の環境にいないから、聴解練習が重要。聴解が大切で、そのために毎日、聞く、朗読に多くの時間を割く。日本語に敏感な耳を作るために聴解を継続していく。これを努力し続けた者の発音は美しく聴きやすい。(学生の回答にも見られたものをここにまとめた)

iii) 日本語の学習方法

1年時：まだ、日本語検定は念頭にはなくのんびりとしていた。各授業時間に習った基本をしっかりと身に付ける事と、単語を1500～4000語位覚える。また、興味を持つためにインターネットバーへ日本語のアニメーションなどを時々見に出かける。

2年時：少し将来のことを考え、日本語学習に力を入れる。インターネットバーへ定期的に通り、日本語の映画・アニメを楽しんで聴力をつける。コンピューターで日本のテレビなどをダウンロードし、聴解練習を毎日する。また、MP3（機械）で日本のニュースを聞く。文型を暗記し、日本文が書けると面白くて、単語を沢山覚える。また、寮生活はクラスメートと一緒になので、日本語会話をし、徹夜で単語覚え競争をして、楽しみながら学習をした。

3年時：12月が日本語検定試験のため、9月は単語覚え（10000語位まで）に力を入れる。また記憶しにくいものにチェックを入れて正確にする努力が大切である。文法の参考書を1冊決め復習をする。聴解を毎日練習することは当然。

10月には1級の試験問題の聴解練習を続ける。1991年実施の問題の練習を始める。91年から99年までは易しかったが、2000年からは難しくなる。間違いやすい部分の反復練習。模試もする（その誤答が多く、質問が寄せられることが多かった）。

11月には2001年から2005年までの1級試験の間違いやすい部分に重点をおいて繰り返しやる。模試にも取り組む。

9月開始の3年時は、時間配分をよく考えて計画し、試験の前日は心を落ち着けてしっかりと休むこと。試験日に疲れを残さない。

④ 学生生活

i) 授業の状況

カリキュラムから見ると日本の大学の科目より専門科目の単位数が多くなっている。また、学生の一週間のリズムはゆったりとし、自己学習時間は十分保障されている。

日本語能力試験一級に合格した一人の学生は「どんな試験の前日も携帯電話（ほとんどの学生が所持）を切って学習に集中しています」という。彼らの学習に立ち向かう意志と集中力は大きく、それが学力向上につながるのであろう。彼らはこの大学で日本語を学ぶのに留学生が一人も来ていないことについては不満で、「いろんな国の留学生にこの大学にも来てほしい」という強い要望を持っている。また、外国人の正規教授がいないことについても不満を漏らしている。

ii) 全員寮生活（自宅通学も可能だが、町から離れているので日本語科学生は全員寮生）

遠くから来ている者が殆どであり、入学と同時に寮の部屋が割り当てられ、入寮が決まる。部屋は4人部屋・6人部屋・8人部屋となっており、寮費が少し異なる。寮ではベッドの回りにはカーテンを付け、その中に小机を持ち込み、隔絶した空間で学べるように場所を作っている。私の見せてもらったのは女子寮であり、男子寮も同じようではないだろうか。食事は大学内に食堂や個人経営のレストランがあり、寮には炊事をする設備はなく、すべて外食である。大学内にはどんな店もあり、外へ出て行かなくても生活必需品が整う。朝は6時半に電気がつき、夜は11時半が消灯。試験時には自分で携帯用の電灯を持ち込み、消灯後も学習を続ける者が殆どである。

iii) 学生の校内外への出入り

月曜から金曜までは担任の許可を門衛がチェック。最近大学の近くでいろんな事件が起こり、出入りのチェックが厳しい。

(4) 一級合格者13名の卒業論文と進路

4年生の後期は授業がなくなり、10月位から学生は全国各地へ仕事探しに出かけたり、西安へ企業が出向いて来て、説明会を開き、就職応募者を募ったりする。

① 卒業論文と進路

卒業論文は4年生の後期3月末に日本語で書いて提出する。面接審査が4月に行われ卒論の合否が決まるが、ほとんど不合格といわれることはない。

日本語科の学生であるから、日本語科の卒業論文のテーマは日本と関係ある内容である。就職を直前に控えているために、学生たちは卒業論文を余り重く見ておらず、書く分量も3000字以上で、それほど多くはない（表3参照）。この時期、彼らが最も気にするのは進路先の事である。そんな事情から、日本語能力一級試験時のような学習意欲は、卒論に対してはあまり感じない。

卒業論文審査には西安の他大学の日本語教師まで動員されて来ている。この大学には日本人正規の教授がいないためだろう。

表3 卒業論文のテーマ（字数）と進路との関係

	卒業論文テーマ	字数	卒業論文と進路との関係
A	虫と日本文化	3700字	進路と無関係
B	日本人の食卓から見れる和の精神	5000字	進路と無関係
C	日本の外来語と和製外来語	6000序	進路に役だっている
D	日系企業の中国進出状況	5000字	
E			
F	日本語の授受動詞	4000字	進路と無関係
G	日本人と自然	4000字	進路と無関係
H	日本の児童虐待について	3500字	進路と無関係
I	日本と中国の道德教育	5000字	進路と無関係
J	日本人の性格について	3000字	進路に役だっている
K	茶道に見る日本人の精神世界	7800字	進路と無関係
L	日本の温泉と健康	6000字	進路と無関係
M	テーブルマナーの中日比較	4000字	進路に役だっている

(A B C…は表2と同じ人物)

卒業論文と進路との関係

卒業論文は少ないものは3000字くらい、多いもので8000字弱くらいである。「卒論と進路との関係は殆どない」という答えであるが、C、J、Mは仕事に役立ったと答えている。また、Dは日本企業でアルバイトを希望しているが見つからないので受験勉強に集中している。Eは連絡がつかなかった。多くのものは将来、日本で大学院に入りたいと考えている。

② 就職状況——勤務条件など新しい世界に入って

上記13名のうち12名の卒業後の進路調査はメールと電話で08年10月に行ったものである（表4参照）。連絡できなかったEは大連で就職し、通訳の仕事をしていると言う。

進路先について

中国人たちの就職希望先のトップは日本企業、次が韓国企業、最後が台湾企業である。

就職していない者は2名。Dは福建の実家でアモイ大学の大学院入試の準備中。Kは西安のコンピューター学校で資格を09年の1月に得て、2月にプログラマーとして就職予定。

就職場所；学生10名の就職先は上海・深圳・青島・惠州など東部沿岸地域である。この地域は最も中国では工業が発達し、日本企業・外国企業が数多く進出しているので、日本語での仕事が得やすい。

会社の職種：仕事内容はほとんどの者が日系企業で通訳者・翻訳者として採用されている。会社は殆ど製造業であり、残業がある。国内販売・海外輸出も行っている。日本企業か日本とかかわって日本の注文品を生産している。Cの場合中国企業であるがホンダの自動車部品を生産しているので会社の部長は全員（4人）日本人、その一人のアシスタントをしている。残業はほとんどないが部長の出張には一緒に行く義務がある。そしてCは将来は日本で仕事を持ち、生活することを望んでいる。

Fは保険会社勤務で残業はない。日本人にも自動車保険を売るので、行動が制約されないが

表4 学生の就職 仕事内容など

	任地	進路先	仕事内容	勤務時間	卒論役立	月給
A	深圳	深圳カシオ電子有限公司	翻訳・通訳	8時30分～17時30分		3700元
B	惠州	惠州市ソニー精密部件有限公司	翻訳・通訳	8時30分～17時30分		3800元
C	武漢	武漢提愛思金興汽車部件有限公司	翻訳・通訳	8時～17時20分	○	1500元
D	アモイ	アモイ大学院入試準備中				
E	大連					
F	杭州	杭州自動車保険有限公司	保険販売	8時30分～17時30分	○	2600元
G	惠州	惠州市統将電気有限公司	翻訳・通訳	8時30分～18時		2500元
H	深圳	ブラザー工業深圳有限公司	翻訳・通訳	8時～17時30分		3800元
I	上海	日月光封装测试上海有限公司	翻訳・通訳	8時～17時		2500元
J	青島	青島麗糸発製品有限公司	日本人顧客開拓	8時～17時30分		800元
K	西安	西安思遠コンピュータ・トレーニング学校				
L	無錫	無錫エプソン有限公司	翻訳・通訳	8時～16時45分		2600元
M	上海	上海シャープ電気有限公司	翻訳・通訳	8時～16時40分	○	3500元

時間外も残業と言わずに働かなければならない。

会社の人間関係：人間関係はおおむね良好である。日本人が上司である場合、日本の習慣・文化などが学べるのでいいという。C、Mの場合、上司が親切でいろいろ日本の習慣も教えてくれ感謝している。また、日本語が出来ても会社内のことをよく知らないので、中国人の同僚が細かく教えてくれるので仕事がやりやすく楽しいと言う。しかしAの場合、独身の上司男性と距離を置くのは難しいので困る。仕事後、お酒を飲みに行くのも次の日に勤務があるからいやだと言う。Lの場合、日本企業であるが社内規則5S（整理・整頓・清潔・清掃・躰）のようなものが沢山あって合理的ではない。どうすればそれを日本人は改めてくれるのだろうかと言っている。昇給も少しだからあまり会社に魅力を感じない。お金を蓄えて日本留学をする予定で、就職したのであるが、今お金を両親に頼んで留学を早め、今年度限りで、神戸大学に入れば退職を考えている。

留学：日本語を学んだ学生だから、少しでも日本の土を踏み、そこで学びたいのだという。経済的に物価の高い日本へは親の仕送りでは行くことができないので、自分で働いて日本留学をしようと考えている。そのためには会社で日本の習慣などを学び、帰宅後の日本語練習を怠らないように頑張っている。

仕事と家庭：今回の調査対象は全員女性だから、いずれ結婚するだろうと考えて、結婚をしてどのように生活するのかを質問した。まず、結婚については相手の決まっている人、そうでない人があるが、全員仕事は続けたいという。その中で一人Hだけは結婚はしないと答えている。

仕事をして、いずれある程度の貯えが出来たら独立して自分で何かをやって行きたい。そのノウハウを会社で仕入れたいと考えている（F、I、J、K）。仕事を継続する時どう育児のことを考えているのか聞くと「親が元気だから、親に預ける。」と全員が答えた。夫と共に保育所を活用すると言うものはいなかった。保育所活用も親の協力を得てするという。夫は仕事があるから育児にはかかわりにくいと考えているようだ。

以上が現在22歳くらいの大学卒の中国女性が考えていることである。

5 台湾学会参加と契約更新

(1) 台湾学会参加問題

① 日本語ボランティア継続採用要求

大学での日本語教育ボランティアは私の場合一年契約で、その予定で出かけた。一年目が終わろうとする5月初旬、学生との散歩の帰路、「一年で終って、帰国するのですか。帰国後、何をするのですか？ もっと西安で日本語を教えてほしい」と言われた。

学生の勤勉な学習振りには感心しており、彼らがどのような進路を取るのか、日本の何に関心があるのか、私は興味をもって見ていた。私の体調もそれほど変化があるわけでもないから、もう一年延ばして、彼らの日本語授業をしてもいいかなと考えるようになった。常州では2年目の契約はシニアボランティアの勧めもあり、継続を決めることは簡単であった。全くそれと同じように決まると考えていたので、もう一年の延長を東京のシニアボランティアに申し入れた。

まもなくシニアボランティアの責任者吉田氏から、電話で、「あなたのもう一年の契約延長は駄目だそうです。西安培華大学にあなたを推薦したのですが、わからない理由を言って継続は駄目だめだということです。年寄りだからという理由はおかしいですね。一年たてば誰でも年は取るものですから、理由になりません。在職中に何か問題があれば別ですが、学生があなたに留まって欲しいと言うのでしょうか。うちはあなたを採用しないのなら、他の人は世話しませんからと言っています。直接、西安の科学技術センターの黄氏に聞いてください」と言うことになった。学生も心配して何度か私に「来年度はどうなりましたか」と尋ねてくれる。吉田氏の指示のように科学技術センターに理由を聞きに行く事考えた。行き方も言葉も分からないので、外事弁公室の朕華氏にその旨を伝え、彼女が黄氏に連絡し、出会う段取が出来た。

黄氏・朕華氏・私の三人で会うことになったが、言葉の問題がある。朕華氏は中国人で英語が出来る、黄氏は中国語だけ、私は日本語と少しの英語が分かるだけである。同僚の日本語の中国人教師に通訳を頼んだが、その時間帯は授業で私の黄氏訪問は通訳「なし」になりそうだった。「困ったなア」と思い悩んでいたところへ、二年生の李文闊君が電話で「今日の午後、科技センターへ先生の来年度採用継続可能かどうかのことを話しに行くのでしょうか。中国語の黄先生と中国語の分からない先生とが英語を少し話す中国人の朕先生を介して、三人でどのように話すのですか？」と聞かれ、困っていることを説明。彼の方から「黄先生の実情が取れば、そして、わたしの日本語でよければ一緒に行きます。」という申し出である。私はそうしたことに思い及ばなかった。2年生の彼はまだ、一級に合格していない。よく出来るが、そのようなことを彼が考えるとは思わなかった。最近、彼と話す機会が多いので、大分、日本語が上手になっているが。私は彼が上手でなくても、申し出てくれたことがうれしかった。また、これまでの経過から話がうまくいかなくても仕方がないが、次年度の日本語教師の採用継続を断る理由は正したい気持ち

が強かった。

すぐに朕氏に李君が一緒に行ってくれることを話し、黄氏の了解を取り、予定の時間に科学技術センターへ一緒に行った。科技センターに着くとすぐに、李君はわたしの次年度の契約継続を要望する話をしてくれた。拒否されても仕方がないと思っていたが、黄氏が開口一番言ったことは「来年度、台湾へ行きませんね」と言う念押しであった。

私はすぐになぜ拒否されたのか理解できた。07年5月の台湾行きが、問題なのだ。中台関係が絡んでいるということである。三通（中国と台湾の通信・人の往来・物資の輸送の禁止）は解決していると思っていたがそんなに甘くはなかった。表向き私の台湾学会出席が悪いと黄氏は吉田氏に言えないので、「年寄りだから」という理由で断ったのだ。私は中国政府に、台湾を訪問する危険人物とみなされ、次年度の継続採用を拒否したのである。国際問題とはそのようなものかと初めて知った。それは私の考えも及ばなかったことである。次年度の採用はその場で決まり航空券の手配がなされた。学生たちにも喜んでもらった。

この件で私は次年度採用されない理由を知りたいと思ったことは良かったし、もう一つは通訳を申し出てくれた李君の発想に感心させられた。以下は彼がその後くれた手紙である。少し長くなるが

「淳子先生は重要なことがあったらよく私と一緒にそれを考えます。例えば西安科学技術センターの所に行って、黄先生と知り合いました。これも私の付き合い方の能力にとっても役に立ちます。（その場で先生の継続採用が決まったこと）

1, 私に自信を持たせて、未来にたち向かわせます

2～4は略

5, 先生との出会いは私を、もっとも高い目標を目指させます。

私のもとの目標は大学を卒業した後、企業に勤められることで十分でした。簡単に生活ができたらいいと思う。田舎のように簡単な生活がしたいのですが、日本へ留学して苦しい生活はあまりしたくありませんが、先生との出会いから自分の責任の重さに気づきました。社会と家族のために、もっと大きい役わりを担いたいのです。今の考え方は、全然変わりました。私は幼い時からどんな苦しい仕事もやったことが多いし、意志も強いし、なぜそんな弱い思想ですか。

これから、自分の強さを発揮して、社会に挑戦します。この点は先生の所から学んだ、一番大切なものと思います、ほんとにありがとうございます。

この夏休みには留学のことについてよく考えました。一体どうしようか。長い時間の思想闘争を通してやっぱり出来れば日本に留学がしたいのです。……留学したいことを先生に言うと、先生は喜んでくださり、ご支持いただきました。ありがとうございます。私は今まで日本語も上手ではなかったし、英語はまだ手をつけていないし、これからですが、日本語以外の特技もないですが。先生も私を信じて助けてくださり、本当に感謝しています。

12月の一級の試験が受からなければいけないと思います。それから日本語を勉強すると同時

に、英語を必死に勉強し始め、経済あるいは教師などの興味を培養すると思います」

彼が自分の既存の知識を使い新たな挑戦をし、人への役立ちを試みようとしたのである。中国人というのは実際に即して自分の能力で出来ることを精一杯發揮しようと考え、人への役立ちのために努力を惜しまないのだ。

② 中国からの台湾訪問の経緯

台湾の学会参加にどのような経過があったかを振り返っておく。

龍谷大学の中村ゼミと田中ゼミで台湾調査旅行をしようという話が春節で帰国した時に出ていた。私が中国へ戻るとすぐに日程が決まり、参加学会の具体案が送られてきた。07年5月の4日から7日まで台湾大学でのシンポジウムである。内容は大学で行われる「白色テロル」「従軍慰安婦」のシンポジウムと白色テロル・霧社事件のフィールドワークなどであり、私は台湾のことをよく知らないで、喜んで、参加することにした。

台湾学会参加のゼミの先生・友人たちは京都から出発し、私は培華大学から出発し台北で会う手はずになった。中国もゴールデンウィークで授業は休みで、私も参加の条件が整っており、3月初旬に西安に戻ったときから、外事弁公室に申し出て、台湾の学会出席の了解を取り、航空券も手配して、準備は順調に進んでいた。心配して申し出たがスムーズに進むので、中台関係は「一つの中国」と言うから、問題はないのだと考えた。

4月9日、外事弁公室の朕華氏から「先生は1回のビザで、中国へ来ているのですから、台湾へ行ったら中国へ帰れません」と告げられ、入手していた航空券のキャンセルをして欲しいと言われた。「後3日しかキャンセルできる期間がありませんから」とも付け加えた。大変、驚いてしまった。私は航空券をキャンセルしたくないし、台湾へいけないことなど思いも及ばないことであった。「どうしてそうなのですか」と質問したが、「今の中国ではどこの町の業者を使っても台湾へ行けば、もう日本に帰るしかないのです。台湾へ行けばもう中国に戻れないから培華の授業はできませんよ。だから、航空券をキャンセルしましょう。渡してください」というばかりである。2度目は朕華氏に前任者の李青氏まで加わり、私の部屋にやってきた。同じことの繰り返しであったが航空券は渡さなかった。

どうしたらいいかわからず、中村尚司先生に電話をした。禮子夫人が出て、「その問題は田中宏先生に話したほうがいいですよ」と言われ、田中先生の電話番号を教えてもらった。夜遅く田中先生と電話で話すことが出来て「1回のビザでも中国に戻ることが出来るはずだ。早速、私も関係者に聞いたりして返事をします」と言ってくださった。翌日の田中先生の返事を待つことになり、私の電話番号を控えてもらった。翌日の田中先生の返事は「大使館に連絡したが温家宝首相が日本に来ていて、忙しく聞くことが出来なかった。いつも中国へ行くときの旅行社に調べてもらった結果、1回ビザでも学生や研究者が中国から外国へ出て戻る規定をもっています。外事弁公室の人と公安に行って説明をし、台湾行きを認可してもらっては如何ですか。」という返事であった。翌日、朕華氏にその話をし、航空券はキャンセルしないことにし、公安に付いてき

てもらい、彼女が公安に話してくれた。勿論、こうした複雑な話は、日本語主任の韓小燕氏に前もって話してもらった。

公安では朕華氏が説明をして一枚の紙を渡された。これは私の勤務する大学の責任者（理事長）が私の台湾行きを認可する書類であった。2日後に理事長から呼び出され、「台湾へ何をしに行くのですか」と質問されたが、学会の趣意書を出していたので、彼は「政府は台湾行きを中止して欲しいのです」と言いながら、学会参加を認可してくれた。それ以降のことは順調に進み計画のとおり台湾の学会には参加することができた。多分、理事長は龍大でドクターを取っていたから、何もいわなかったのだろう。

③ 台湾訪問での問題：二つ

台湾訪問で他に問題が二つあった。中国からの台湾訪問は日を指定するだけで、本人の到着時間の指定は出来ない。中国には台湾に行くのに、4箇所出口があるが、その場所も時間も指定できず、航空券に指定された通りに行くのである。私の場合、香港周り決められていた。途中、香港での出国？審査は厳しく、時間のかかるものであり、一般客と異なる部屋に入り審査を受けた。なんだか取調べをうけているようであった。

もう一点は西安から台湾に行くのだから台湾紙幣が必要だと考えて、いろんな銀行を回ったが人民元では台湾紙幣への換金ができなかった。中国の銀行は台湾紙幣の交換をしていないことが最後に分かった。夜遅く台北に着いた時、空港の銀行で人民元は「換金だめ」といわれ、ホテルへのタクシー代を持っていなかったのも、日本円で台湾元と換金することが出来、何とか目的地に着いた。

以上のようなことで私の希望する台湾行きは実現したが、この件で初めて中国での国際政治の厳しさを実感した。田中先生の指導がなければ私は台湾行きをあきらめ、わけも判らず中国はいやな国、だめな国と決め付けてしまったのではないかと考える。

(2) 「東アジア共同体」を読む

李文閻君は友人達と日本へ留学したいと申し出て、本人も易きにつくのはよくないと考え始めたようだ。私には日本語専門の人が日本留学といった場合、何を専門にするのかわからなかった。

李文閻君グループの学生が日本語で何か読んで経済の勉強をするという。私は「21世紀経済システム展望」（ジェームズ・ロバートソン 石見尚・森田邦彦訳 日本経済評論社）を勧めたが、それではなく、たまたま中国へ私が持参していた「東アジア共同体」（谷口誠 岩波新書）をみて、これを読みたいと言う。仲間4人で、読むことになった。彼等は詳しく知らないEUのことを思い浮かべていたようである。

3月の半ばから日曜日に「読書会」を持つことにした。彼等は大学の寮から2時間ほどかけて毎週やって来る。読んできて、自分の担当の部分を報告するのである。分からないところは議論し、次の週には読んだ範囲の質問を私が作っておいてはペーパーに書くのである。日本語のまだおぼつかない人も一生懸命に辞書を引きながらやった。毎回20ページ余りであるが、彼らには日

本語学習の負担は大きかったと思う。6月の初めには全部読み終わり、定期考査に入った。彼らはアジアで中国・日本・韓国などが共同体の中心的な役割を担わなければならないと考え始めているようである。

(3) 日本の大学院を目指す学生たち

08年7月初め私は帰国した。その後、彼らは大学院入試のために読むものとして「物語現代経済学」(根井雅弘 中公新書)を読み始めている。この学習会を京都と Skype で繋いでやることになっていたが、まだ出来ていない。理由は大学のインターネット使用者が多く、これまでのものでは容量が足りないので、新たなインターネット容量の大きなものを増設する工事に時間がかかっている。9月から待っている学生たちはその遅いことに今はパニック状況のようである。11月10日頃につながったが継続していない。

こうした読書会を通して彼らは学ぶことで結束を強め、京都の大学院へ進みたいと考えるようになっている。彼等は日本語が専門であり、留学で何を専門にするのか分からず、考えたり悩んだりしたようであるが、龍大の経済でドクターをとり、現在フフホト(内モンゴル自治区の区都)の大学で経済学と日本語を教えているモンゴル人のウインガー氏と話をし、院入試を受けることに決めたようである。

ま と め

なぜ中国人学生はよく学ぶのか。中国人学生がよく学ぶ理由としては、人口が多い競争社会の中でよりよく生きていくためには学ぶことが最も大切なことであると考えているからである。中国人の就学熱の高さや国の方針のもとで大学進学者が激増し、全国のいろいろな家庭から大学へ進学してきている。しかし、急速に大学生数が増大した結果、現状では高等教育の条件が整っているとは言いがたい。

中国人学生が学ぶ理由を私は以下の五点でないかと考えている。

まず、中国には日本より学生が教師を尊敬する習慣のようなものが伝統的に育まれている。9月10日には「教師の日」が設けられるのもその一つである。学生は意見を明確に述べ、よく教師の教えに従う。私は中国の詳しい教育関係の資格のことは知らないが、教師資格のない人も日本から来て、日本語を教えている。「物事の理解の早い人が、遅れた人を教える」というのが中国人の考え方なのだろう。今のところ専門学校や大学では日本のように資格の有無が問われない国なのだろう。観光ガイドをやっていた先生方は教師資格を取るために休日に資格試験に行くという。

第二に、現在の中国は私たちの日本の高度成長の時代と同じような状況ではないだろうか。日本でも60年代末ころの高校生は親たちから学ぶことの必要性を聞かされ、将来の生活保障のために大学教育を受けることを進められていた。そして受験勉強が余り面白くなくても取り組み、大

学受験に備えたが、今の中国もそれと同じようなのかもしれない。受験ということにはどの学生も大変敏感であり、親達もそのことでの心配は大きいと言う。

どの学生を見ても親係りではなく、自立して学ばなければ先へ進めないということをよく自覚しているように見受ける。年齢相応に大人といえるのではないだろうか。こうした学生に「なぜ学ぶのか」と尋ねてみた。学生の多くは彼らの親が高い学費を支払って、苦勞して大学へ送り出してくれている。それに應えることは、「熱心に学ぶことである」という。このことから、まだ中国に残るノーマルな家族関係が見え、家族の支えあう姿を見て取ることもでき、それが学ぶことにつながっていると考える。

第三に、西安の学習環境は好条件であるといえる。大学の立地条件は西安郊外であるために若者が繰り出して遊べる場所は近くにはなく、周辺は美しい村である。繁華街から大学は遠く離れており、寮と教室とが学生たちの生活の中心の場で、学習集団が形成されている。女子寮を見せてもらったが、一つの部屋に生活している学生が同じ学年・同じクラスの者が入寮する場合が多く、寮を中心にいい学習グループができるとお互いに学習の刺激も生まれ、学力向上につながる。

第四に、やはり大学生達は選ばれた人と考えられるのではないだろうか。常州で教えた専門学校と比較すると大学生のほうが学ぶことに重点を置く者が多い。常州で教えた専門学校の即戦力と言う考え方とは少し異なる。常州旅遊学校卒の日本語で活躍する周心怡さん（22歳）と陳慨君（21歳）のことであるが、日本語の上達の早い学生で、2年前に1級に合格し、女性の周心怡さんは今、常州で、日本語通訳の仕事をしている。「日本語を学んだことで、言葉の面白さを知りました。他の知らない言葉を身につけるのが楽しくてたまらないから、次にどの言葉をやらうかと考えています」と話してくれた。陳慨君は卒業して、常州市開設の「常州富国軟件培訓センター（日本語とコンピューターを教える学校）」で日本語の先生をしている。中国語コンピューターの教科書を彼が日本語に翻訳したという。彼の翻訳した本をこのセンターでは08年度から授業で使っている。私の常州訪問時に、彼の訳したコンピューターの日本語教科書を1冊、プレゼントしてくれた。彼は日本語学習を始めて5年目であるが、自分の仕事に即応して、そうした本を訳そうと考え自発的に行き、教室でそれを使うところまで実行した。彼のオリジナリティには感心させられた。彼らは専門学校で学んだだけあるが、お金の準備が出来たら「日本留学を考えている」と語ってくれた。

前述したように日本語と言う基礎を備えて自信をもった学生（陳慨君・周心怡さん・李文闊君など）が自分の未知の世界への役立ちを考え、それを目指して挑戦し、切り拓きをするオリジナルな発想は、興味深いものがあり、そのことが彼らの自信になり展望を作っている。

第五に、出生率の問題である。82年～90年頃までは出生率が中国人口ではピークを示している。丁度、私が日本語を担当した学生たちはその中に入っている。彼等は彼等自身大変激しい競争にさらされていることを良く知っていて、学ばなければ仕事を得られないと考え、その重要性を自覚している。

以上、中国で一般の高等教育中の日本語教育活動に携わって、私が見た中国人学生の学ぶ姿の

一端を紹介した。何人かのそうした学生が生まれていることは私にとってとても楽しみで、中国へ出かけて、日本語を教える仕事を持ったことは大きな意味のあることだと思える。

参 考 文 献

- | | | |
|-------------------------|---------|----------------|
| 戴 國 輝「台湾いずこへ行く」 | 研 文 出 版 | 90年1月 |
| 興 梶 一 郎「現代中国」 | 岩 波 新 書 | 06年6月 |
| 若 林 敬 子「中国人口超大国の行へ」 | 岩 波 新 書 | 94年6月 |
| 劉 建 雲「中国人の日本語学習史」 | 学 術 出 版 | 05年11月 |
| 大 塚 豊「中国大学入試の研究」 | 東 信 堂 | 07年6月 |
| 南亮進・牧野文夫・羅敏鎮「中国教育と経済発展」 | 東洋経済新報社 | 08年7月 |
| 王 智 新「現代中国の教育」 | 明 石 書 店 | 04年4月 |
| 清 水 和 美「中国問題の内幕」 | 筑 摩 新 書 | 08年2月 |
| 朱 建 栄「中国第三の革命」 | 中 公 新 書 | 02年8月 |
| 月刊誌「Foresight」の中国関係の記事 | 新 潮 社 | 07年1月から08年6月まで |

(受付 2008年11月25日)